

令和七年学力検査

全日制課程

第一時限問題 国語

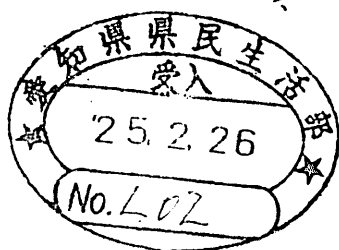
検査時間 九時十分から九時五十五分まで

「解答始め」という指示があるまで、次の注意をよく読みなさい。

注 意

- (一) 解答用紙は、この問題用紙とは別になっています。
- (二) 「解答始め」という指示で、すぐこの表紙に受検番号を書きなさい。続いて、解答用紙に氏名と受検番号を書き、受検番号についてはマーク欄も塗りつぶしなさい。
- (三) 問題は(1)ページから(9)ページまであります。(9)ページの次からは白紙になっています。受検番号を記入したあと、問題の各ページを確かめ、不備のある場合は手をあげて申し出なさい。
- (四) 答えは全て解答用紙のマーク欄を塗りつぶしなさい。
- (五) 印刷の文字が不鮮明なときは、手をあげて質問してもよろしい。
- (六) 「解答やめ」という指示で、解答することをやめ、解答用紙と問題用紙を別々にして机の上に置きなさい。

受検番号	第
番	



国語

一次の文章を読んで、あとの(一)から(五)までの問いに答えなさい。

① 建築家は、直接自分で建物をつくるわけではない。レンガを積んだり、ノミをふるったりはしない。建築家は、何を、どこに、どんな形で、どんなふうに置くのか、を決めている。つまり、建物のつくり方をつくるのだ。この、「つくり方をつくる」というコトによって、「建てる」コト全体が統御されているからこそ、コンクリートは壁になり、材木は柱になり、建物になることができる。このことを、ミース・ファン・デル・ローエという建築家は「すべてのものを適切な場所に置き、すべてのものにその性質に従った役割を与えることによって、われわれは秩序をもちうるはずである」と言った。「A」ミースは「二個のレンガを注意深く置くときに、建築がはじまる」とした。レンガはどうでもよい。二個というのが本質だ。一個ならどう置いてもただのレンガだが、一個目を置くときに両者の「関係」が生まれる。

② モノとモノの「関係」が「秩序」だてられていること。その関係が社会に開かれ、使い手を迎えるとき「機能」が生まれる。一般に「機能」というものはあらかじめ決まっていると考えてしまいがちだが、それはかならずしも正確ではない。たとえば、住宅の場合、敷地の中にさまざまな大きさの部屋をバラバラに置いて、それぞれに居間や厨房、寝室、書斎などと名前をつけてみたところで、それぞれの部屋がそれぞれの役割をきちんと果たすことができるわけではない。機能もまた、コンクリートや材木と同じように、意味ある位置に、意味ある形で配置され、関

係づけられることによって、「B」秩序だてられることによってはいじめてあらわれる——機能する——のだ。そして、諸室として機能しうるよう秩序だてられた物体が、エネルギーの流れの場に適切に置かれ、生じる光や熱や風や音の状態が、そこにいる人間にとって快適な水準で安定していることではじめて、建築が成立する。(中略)

③ 建築家は自分ではつくらない、つくり方をつくるのだ、と書いた。暗黙の前提がある。「つくり方」はつくる前に「あらかじめ」つくられている、という前提である。当然のように聞こえるかもしれないが、これは決して当然のことではない。もともと、何であれモノは、それを使いいたい人が自分でつくっていた。こんなふうに使いたいというモノのできあがりのイメージは、使用者であり製作者でもある人の頭の中に、ぼんやりとした形である。とはいえモノの加工はイメージどおりに進んだりしない。天然の材料は不均質で癖があつて狂ったり暴れたりする。つくり手はつくりながら、材料のもつ癖にそつてイメージを修正しつつ作業を進める。だいたいできたら、ちよつと試してみる。いまいちだつたら直す。満足なら、すぐに使いはじめるだろう。もつと直したいところがあつても、とりあえず使えるし、こんなもんでいいやと妥協したりしながら。あり合わせの食材で料理をしたり、雪だるまをつくつたりするとき、今もこんな感じだ。その場で器用につくるのだ。

④ プロセスが場当たり的に見えても、最終的に物体が秩序だてられているから機能する。素朴な物づくりのプロセスにおいては、「つくり方」は「あらかじめ」何かの形で外在的に示されているわけではない。すべてはつくり手の頭の中にあり、つくられていくと同時に修正されていく。それが集団によって行われる場合でも、息が合っているなどと呼ばれる

イメージが共有されている状態が前提にある。言葉はいらない。このとき、つくられるモノとそのつくり方は一体である。すなわちモノと情報は不可分だ。しかし、つくる対象が一定の閾値を超えて大規模かつ複雑で、多種多様な主体が関わる場合には、そして何より使う人をつくる人が異なる場合には、製作作業にかかる前に「あらかじめ」、達成されるべき秩序の有り様について、何らかの情報によって「つくり方」を外部に記述し、共有しておくことが必要になる。このとき、つくられるモノからつくり方が分離する。つくり方が情報としてモノから独立して操作されるようになる。施工者ではない設計者、「建築家」の誕生である。

(中略)

5 建築が具備すべき諸要件をあらかじめ整理して記述しておくこと、またはその記述を、建築の「プログラム」と呼ぶ。英語の“program”という言葉は「program前に+gram書く」ことだ。コンピュータの「プログラム」と同じ言葉である。建築は情報の技術なのだ。人工知能による建築の自動設計がはじまっている。一挙に生身の人間の建築家にとつてかわるわけではない。クルマの自動運転が一気に行われるのではなく、オートマチックから横滑り防止装置、自動ブレーキ、車線維持装置等々さまざまな安全装置という形で徐々に組み込まれていったように、人間にとつてめんどろなところから徐々に、建築の設計・施工・管理の自動化・機械化が進んでいく。敷地が一つ一つ違うから建築は一つ一つ違うとよく言われるのだが、細部の納まりはだいたい共通なので標準化が進んでいる。同じ形が幾重にも反復する超高層ビルは自動建設に向いている。こういうところから自動化・機械化が進む。あらゆる建築部材にセンサーとアクチュエータが埋め込まれ、「モノのインターネット」に接

続ける。

6 建築行為の自動化の進展と同時に、逆説的に聞こえるが、何であれ建築は、それを使いたい人が自分でつくっていくようになるであろう。関心の高い部分だけを人間が自分で決め、難しいところ、めんどろなところは機械がやってくれる。かつて、モノから離脱して自立したはずの情報が、一周まわつてもう一度モノと一体になって環境を再構成する。環境とそこに住まう自分との関係を、区別のできないひとつながりのものとして見通して、つくりながら、使いながら、つくり続ける。

(『14歳からのケンチク学』所収)

もとえまきしげ
本江正茂「あらかじめ、つくり方をつくる」による

(注)

○ 1 6は段落符号である。

○ 厨房台所。

○ プロセス過程。

○ 閾値ここでは、程度のこと。

○ オートマチックここでは、自動変速装置のこと。

○ 標準化品質、形状、寸法を標準に従って統一すること。

○ アクチュエータエネルギーを機械的な仕事に変換する装置。

(一) 「A」、「B」にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選びなさい。

- | | | |
|---|---------|---------|
| ア | 「A」また | 「B」でも |
| イ | 「A」また | 「B」すなわち |
| ウ | 「A」なぜなら | 「B」でも |
| エ | 「A」なぜなら | 「B」すなわち |

(二) 第二段落の内容について述べた次の文の「X」から「Z」までにあてはまることばとして最も適当なものを、あとのアからオまでのの中からそれぞれ選びなさい。

建築は、各部屋がそれぞれの「X」を発揮するように配置され、秩序だてられた「Y」が適切に置かれて「Z」としての快適性が保たれることにより成立する。

ア モノ イ 関係 ウ 社会 エ 使い手 オ 機能

(三) ① これは決して当然のことではない とあるが、その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選びなさい。

ア モノの製作者が使用者である場合には、「つくり方」は製作者の頭の中にあり、つくりながら修正されるものであるから。

イ 使いたい人が自分でモノをつくっていた時代には、天然の材料を使うことが多く、イメージどおりに加工しやすかったから。

ウ 使いやすいモノをつくるには、決められた「つくり方」にこだわらず、つくり手にとってつくりやすい形に変える必要があるから。

エ 住む人間にとって使いやすい建物をつくるには、あり合わせの材料でつくる料理などとは異なり、妥協が許されないから。

(四) 次の文章は、第四段落以降に述べられている建築に関する筆者の考えを、ある生徒がまとめたものである。この生徒の文章に対する評価として適当でないものを、あとのアからカまでのの中から二つ選びなさい。ただし、マーク欄は一行につき一つだけ塗りつぶすこと。

素朴な物づくりでは、つくり方はあらかじめ外在的に示されておらず、つくられるモノとそのつくり方は一体である。しかし、つくる対象が大規模かつ複雑で、多種多様な主体が関わり、使う人をつくる人が異なる場合には、製作作業にかかる前にあらかじめつくり方を記述し、共有することが必要になる。このとき、つくられるモノからつくり方が分離し、つくり方が情報として独立して操作されるようになり、施工者ではない設計者としての建築家が誕生した。

建築は情報の技術であり、人工知能による建築の自動設計がはじまっている。一挙に生身の建築家にとってかわるわけではないが、人間にとってめんどろなところや標準化が進んでいるところから、徐々に設計・施工・管理の自動化・機械化が進んでいく。それと同時に、かつてモノから離脱して自立したはずの情報ももう一度モノと一体になり、建築は使いたい人が自分で行うようになるであろう。

ア 情報化が建築にもたらした利益と不利益を明確に整理している。
イ 同じ内容が繰り返し返されている部分を省略して端的にまとめている。
ウ 本文では別々の文で書かれた部分をつないで流れをよくしている。

工 建築以外で人工知能による自動化が進んだ具体例を生かしている。
オ 自動化の進行に伴って建築家の仕事が変わる可能性にふれている。
カ 指示する語句や前後の文と文を接続する語句を適切に用いている。

(五)

この文章の論の進め方の特徴として適当なものを、次のアからカまでのの中から二つ選びなさい。ただし、マーク欄は一行につき一つだけ塗りつぶすこと。

ア 問いを立て、それに対する答えを示しながら自分の意見を述べる
ことにより、説得力を高めている。

イ 具体例を示し、それらを一般化・抽象化することで、自分の意見
がはっきりと伝わるようにしている。

ウ 仮説を立て、その検証と考察を行うことで、自分の意見が客観的
で妥当であることを示している。

エ 結論を提示し、経験談を交えた複数の根拠を示すことにより、自
分の意見の正しさを強調している。

オ 対立する二つの見方を示し、それぞれに対する批評を行うことに
より、自分の意見を明確にしている。

カ 一般的な考えを挙げ、それを根拠を示して退けることで、自分の
意見を読者に印象づけている。

二 一次の(一)から(三)までの問いに答えなさい。

(一) 次の文中の傍線部①、②に用いる漢字として正しいものを、それぞ
れあとのアからエまでのの中から一つ選びなさい。

亀の動きは、^①カン^②マンだ。

① ア 閑 イ 緩 ウ 幹 エ 慣
② ア 漫 イ 満 ウ 万 エ 慢

(二) 次の文中の傍線部と同じ意味で用いられている漢字を、あとのアか
らエまでのの中から一つ選びなさい。

彼の描く絵は、構図が優^レれている。

ア 優^レ越 イ 優^レ雅 ウ 優^レ先 エ 優^レ柔

(三) 次の文中の「A」にあてはまる最も適当なことを、あとのア
からエまでのの中から選びなさい。

これまで一度も勝てなかった相手に勝って「A」思いた。

ア 目に余る イ 唇をかむ ウ 胸がすく エ 腕が鳴る

三 次の文章を読んで、あとの(一)から(五)までの問いに答えなさい。

[1] 最近、英語を習い始めた。週に一度の個人授業だ。この一年、オーストラリアでの生活はインチキ英語で何とかやってきたものの、限界がある。仕事でもたまに英語が必要になるが、初めて会った人に「よろしくです。私、あなた会ってうれしかった、でした」てな挨拶をするのはいい年していかげなものかというわけで一念発起したのだ。(一)

[2] 私がオーストラリアに引越したのは英語がペラペラだからだと思っている人もいるようだが、全然ペラペラではない。オーストラリアで生まれてはいるが、三歳で日本に来てしまったし、その後のシンガポールや香港の生活でも日本人学校だった。英語は学校で勉強しただけだ。私の英語を日本語に直すと、こんな感じ。ある日、強風で庭の物置の屋根が飛びそうになったので、急いで不動産屋の担当者に連絡してすぐに修理の人をよこして欲しいと訴えた時の電話の再現。「嵐で強い風、いま納屋の屋根がもうすぐ吹き飛ばされてしまったから、危険だ危険だ。たとえば吹き飛んだら、家の前に電気の設備があった、もしぶつかる心配、なぜなら電力の線が壊れると暗闇で近所が大騒ぎ！」(二)それでも担当者は、物置の屋根を直して欲しいらしいと推測して人を手配してくれた。通じてしまうと気分が良くなって、これで意外といけるんじゃないかという気になる。(三)でも一年もこれが続くと、かなり落ち込むのだ。日常のちよつとしたことを言うのにも、自分がめっちゃくちゃな言葉をしゃべっていると毎度自覚しなくちゃならない。(四)(中略)

[3] 元が無口であれば、必要最低限のことを伝えればいいのでストレスがないのかもしれない。でも私は子どもの頃から札付きのおしゃべりだった。長じて何度も痛い目に遭いながら社会に適應するにつれ、しゃべる

分量の抑制はできるようになったが、しゃべりたいことがなくなるわけではない。店の人と会話をしているも、ちよつと笑わせてみようとか、すぐにいらぬ欲を出してしゃべりすぎてしまう。でもオーストラリアでは、こんなこと言ったらウケそうだなとか、いま相手は気のきいた返しを待っているのでは？とか思っても、言葉が出ない。すごーく鈍くて内気な人ようになってしまう。その時に相手の顔に「ああこの人、言葉がよくわからないんだ」という表情が浮かぶのを見ると、実に実に悔しい。(中略)

[4] 言葉の苦しみは、何も外国語に限ったことではない。日本語だって、思うように話せないでしんどい思いをしている人はたくさんいる。考えていることはいろいろあるのに、それを言葉として瞬時に出力できないために誤解されたり、関心を持たれなかったりして、悩んでいる人がいるのだ。今まで多くのそういう人たちの悩みに接して話をしてきたが、私にも英語を通じてようやくわかったのだ。まるで水槽の中に閉じ込められているみたいなきさ。相手がいらだっているのがわかってても、何もできない悔しさ。

[5] あれは何歳の時だろう、おそらく小学三年生ぐらいだと思うが、私はダイニングで本を読みながら、両親が話をしているのを聞いていた。そのとき文字を追いつながら、自分がほとんどの字が読めるようになっていくことに気がついた。それまでは、わからない言葉や漢字の前後から意味を推測しながら本を読んでいた。でもその時、自分がどこも飛ばさずに読めていることに気がついたのだ。そして耳から入ってくる大人の込み入った会話も、聞きなれた声の塊ではなく、意味を追える言葉のやりとりだった。それはまるで水から上がったような清澄な風景を私に見せた。ああ、私は受け入れられた。この世界は私の居場所だ！と思っ

た。「自分はやっと一人前になった」と実感したのだ。

〔6〕 私には十二歳と九歳の息子がいる。去年からオーストラリアの学校に通っている。彼らもやはり最初は、言葉を持たない人たちだった。子どもは、うんと小さい時から大概のことはわかっていて、彼らの中に何かの表現を求める意思があるのもわかる。けれど、ままならないのだ。脳も舌も、彼らの思うようにはまだ働いてくれない。ままならないからいらだって泣いたり、じっと考えて大きくなるのだ。その長い長い待ち時間を経て、ある日彼らは語り出す。語りながら、直感から言葉の世界へとこぎだしてくる。そして行ったり来たりしながら、次第に帰り道を見失う。やがて言葉にはならないものが確かに自分の中にあることに気づいて、言葉を疑い始めるのだ。それが、いま十二歳の長男。不自由な英語と、不本意な日本語を使って、いま彼は自分を厳しく点検している。一度身体化した言葉が、大人へと変化する心身と不適合を起こしているのと同時に、新たな言葉を身体化する最中でもあるのだ。彼の言語体験は、私の知らない道程をゆく。彼の身体の変化が私には未知のものであるのと同じように。

〔7〕 九歳の次男は、まだ半ば非言語の豊穡ほうじやくの中に遊んでいる。彼は日本語も完全に自分の言語としていない時期に英語に触れたため、むしろ言語を超えて自分とつながる力を持っていることに気づいた。日本語だからできることが英語だとできないのではなく、日本語も英語も自分の内なる衝動を言い表すのに十分でないにもかかわらず、人と関係を結ぶことができる年齢なのだ。だからむしろ、言葉の不全によって万能感を得ている。彼にとつては、日本語も英語もまだ自分の言語ではない。しかし私にある日その訪れがあつたように、彼にもいつか水から上がる日がくるだろう。その時、彼がどのような言語体験からどのような世界

に受け入れられたと感ずるのかは、想像がつかない。

〔8〕 二回目のレッスンで先生は、私にこんな質問をした。「自己紹介の練習をしましょう。あなたが一番質問されたいことはなんですか？」いや、別に望んで質問されたいことなんてないよ！聞かれれば大抵の質問には誠実に答えるけど、こちらからは是非ともしゃべりたいことなんて、その人との関係によるだろうし……。「あなたがしゃべりたいことを僕が質問しますから、自分について最も他人に知って欲しいことを教えて下さい」なんでもないってば！といらだちながら、気がついた。今の私には、こうして書いたりしゃべったりする場がある。息子たちは熱心に質問してくれる。いろんな人が話を聞きに来てくれる。だけどかつて、私は切望したのではなかったか。私はここにいて！あなたは誰？と尋ねて欲しい。そんなお前でもそこにいていい、と言つて欲しいと。

(中略)

〔9〕 そしてどれほど無口な人にも、きつとあるのだ。幾重にも嚴重に閉ざされた扉の奥で、いつか誰かが訪ねてきてくれるのをひそかに待つている、柔らかな部分が、それにたやすく触れることはできない。けれど誰の中にもきつとそれがあるだろうと想像することは、言葉にほのかなぬくもりを与える。

(『ベスト・エッセイ2016』所収)

小島慶子「インチキ英語の高い壁」による

(注)

- 〔1〕〔9〕は段落符号である。
- 納屋なや＝物置小屋。
- 札付き＝悪い評判が定まっていること。
- 道程＝ある状態に至るまでの過程。
- 非言語の豊穡ほうじやく＝ここでは、言語以外のやりとりが豊かであること。

(一) 次の一文が本文から抜いてある。この一文が入る最も適当な箇所を、あとのアからエまでのの中から選びなさい。

その不全感は、じわじわと自尊心をむしばむ。

- ア 本文中のへ1
イ 本文中のへ2
ウ 本文中のへ3
エ 本文中のへ4

(二) ① まるで水から上がったような清澄な風景を私に見せた せいじよう とあるが、

その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選びなさい。

- ア 言葉の意味が理解できるようになり、これからは両親との会話が円滑に進むことに安心感を抱いたということ
イ 文字が読めたり大人の話の内容が理解できたりするのは、両親の教育のおかげであることに気がついたということ
ウ 文字や言葉が身についたことで、本の内容や両親の会話の意味を明確に理解できるようになったということ
エ 本を読んだり両親の話を聞いたりしているうちに、言葉のすばらしさを発見することができたということ

(三) 次のアから力は、この文章を読んだ生徒六人が、意見を述べ合ったものである。その内容が本文に書かれていることに近いものを三つ選びなさい。ただし、マーク欄は一行につき一つだけ塗りつぶすこと。

ア (Aさん) 筆者は両親が話をしている前で本を読むことを続けるうちに、知らず知らず大人の言葉を覚えてしまい、大人向けの本も読めるようになったために、まだ小学校三年生ぐらいなのに、自分は一人前になったと実感したのだと思います。

イ (Bさん) 筆者の息子たちが言葉を身につける過程の話は、とても興味深かったです。子どもは言葉を身につける前は直感の世界に生きていて、言葉が自分のものになつていなくても、うんと小さい時から大概のことはわかつているものなのですね。

ウ (Cさん) 筆者の長男は、日本語を身につけた後でオーストラリアの学校に通うことになりました。しかし大人への成長途上にあつて、自分の内面を日本語で十分に表現できないところへ、新たに英語を身につけなければならないので、大変な状況なのだと思います。

エ (Dさん) 筆者によると、小さい頃に身体化した言葉は大人へと変化する心身と不適合を起こすため、一度その言葉を身につけ直す必要があります。それと同時に外国語を新たに勉強すると、小さい頃に身体化した言葉が大人の言葉として定着しやすくなるようです。

オ (Eさん)

筆者の次男は、日本語も英語も自分の内なる衝動を言い表すだけの力に身についていないために、人と関係を結ぶことが十分にできない年齢です。そのため、日本語の世界と英語の世界のどちらに受け入れられるのか、今はまだわかりません。

カ (Fさん)

筆者自身は子どもの頃に外国語に習熟することはなかったようですが、長男は日本語を身体化した後で外国語を身体化しつつあります。一方、次男は日本語を身体化する前に外国語の世界に身を置くことになったので、三者三様の言語体験といえます。

(四)

第八段落から読み取ることができる筆者の心境として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選びなさい。

ア わかり切ったことを答えさせようとする英語教師の姿勢にじれったさを感じていたが、それが英語をうまく話せない自分への配慮であると知り、思いが至らなかつた自分を恥じるようになっていく。

イ 自分の内面に深く踏み込む質問をしてくる英語教師に不信任を抱いたが、実は自分の英語力のなさを心配してくれていることに気づき、英語で自分のことが語れるようになっていこうと思い始めている。

ウ 英語で質問に答えることができない自分へのふがいなさからいらだちを隠せなかつたが、自分に寄り添った質問を英語教師がしてくれていることを理解し、感謝の気持ちを抱くようになっていく。

エ 自分について語りたいことは何かという英語教師の質問に戸惑って感情が高ぶったが、その質問を切望したかつての自分を思い出し、それが相手の存在を受け入れる問いであることに思い至っている。

(五)

この文章の表現の特徴として適当なものを、次のアからカまでの中から二つ選びなさい。ただし、マーク欄は一行につき一つだけ塗りつぶすこと。

ア 緊迫した場面で擬態語や擬声語を用いることにより、読者にその場にいると思わせるような臨場感を生み出している。

イ 和語と外来語の使い分けにより、英語を習う前と後で筆者の心境が大きく変化したことを表現している。

ウ 倒置法を用いることにより、他者や世界に受け入れられることへの思いの強さや深さを強調している。

エ 筆者の経験を時間軸に沿って写實的に述べることで、全体を通してわかりやすい印象を与えている。

オ 会話文以外でも話し言葉を多用することにより、筆者の率直な思いや感情の起伏を表現している。

カ 筆者以外の複数の視点から一つの出来事を描写することで、筆者の経験が特殊なものではないことを表している。

四 次の古文を読んで、あとの(一)から(四)までの問いに答えなさい。(本文の……の左側は現代語訳です。)

武士のもとに、力強くして矢をはしらかし、物を強く射さする弓あり。主の武士これを愛し、是をしみて、重き宝とおもへり。ある

人、この弓をとりて、矢を射けてひかんとするに、強くしてひくにあた

はず。かるがゆゑに、おとをも射ず、物にも強くも立たず。是がやう

に、力ある人は堂塔をもつくり、法花・真言をもつとめおこなふべきな

り。力なきわれらは、念仏の弱弓をもて射ば、おのづから射当つる事も

有るべし。たとへば、玄象と云ふ琵琶は、ひかんとすれば手をきらひ

てならず。ひきならはしたる琵琶をもて、おのづから心すみておもしろ

きがごとし。念仏の功德も又々、かくのごとし。感じるようなものである

(『宝物集』による)

(注) ○ 玄象 唐からもたらされた琵琶の名器。

○ 功德 善行を積むことによって得られる仏の恩恵。

(一) 重き宝とおもへり とあるが、その理由として最も適当なものを、

次のアからエまでのの中から選びなさい。

ア 高価な材料でつくられた弓であったから。

イ 矢の威力を高める弓であったから。

ウ 的中率の高い弓であったから。

エ 権力者のあかしとなる弓であったから。

(二) ある人 と本文中での位置づけが近いものを、波線部アからエまで

の中から一つ選びなさい。

(三) 手をきらひてならず とあるが、その説明として最も適当なものを、

次のアからエまでのの中から選びなさい。

ア 手が大きい人でなければうまく弾けないということ

イ 美しい心の持ち主は澄んだ良い音を出せるということ

ウ 音を出すには十分な技量が必要であるということ

エ 弾くことで仏への信仰心がいつそう深まるということ

(四) この文章の内容として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選びなさい。

ア 富や権力をもたない者でも仏の恩恵を受けることができる。

イ 仏によって救われるかどうかは生まれる前から決まっている。

ウ 念仏を唱える際に仏の恩恵を得ようと欲張るのは誤りである。

エ 俗世間を離れて修行を重ねた者だけが仏によって救われる。

(問題はこれで終わります。)